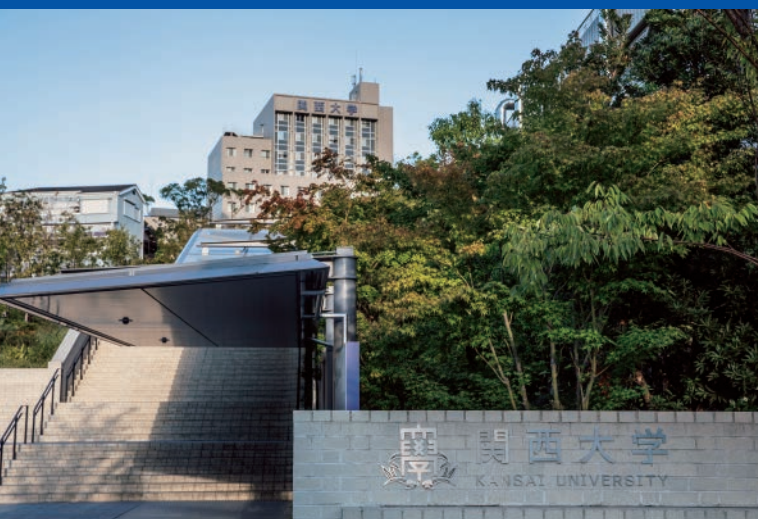


関西大学文化交渉学

ICIS NEWS LETTER

ニューズレター



CONTENTS

- 淀川図巻の超高精細デジタル化—驚きの一事例—
- 東アジア文化交渉学会第11回国際シンポジウム開催
- 研究員の活動報告

淀川図巻の超高精細デジタル化—驚きの一事例—

美術作品のデジタル化をめぐる、18世紀に活動した大坂の画家、大岡春ト（1680-1763）が描いた《浪花及淀川沿岸名勝図巻》（関西大学図書館蔵）を採り上げて、美術作品のデジタル化についての有効性と問題点について、そして真作（オリジナル作品）と複製の問題について、具体的に日立製作所（横浜）と〔株〕エーディエス（京都）の撮影技術による超高精細デジタル画像を紹介する。

大岡春トのこの絵巻は、延享2年（1745）、春ト66歳の円熟期の作品である。横幅が約8メートルに及ぶ画面には、現在の大阪府の堺から、大坂の中心地である道頓堀を経て京の伏見に至る淀川沿岸の風景が描かれている。この絵巻をカメラ方式によってデジタル化した。超高精細デジタル化によって、100倍を超える拡大画像が実現し、これまで困難であった文字の解読が容易になるとともに、繰り返し見ることでできる画像を手に入れたことの意義は大きい。ともかく、どこまで拡大しても、画像の精度が落ちないことは、超高精細デジタル化の素晴らしい技術である。

この絵巻のデジタル化は、この絵巻の場合、横の約8mに及ぶ1画面の撮影に、約1000枚のカメラ方式による撮影が行われ、それらを1画面に繋ぎ合わせている。これには繋ぎの技術も必要であり、それなりに時間がかかるが、得られた画像は、これまで成し遂げられていない世界一の超高精細デジタル化の珍しい成果である。

デジタル化の長所と並んで問題点を指摘しておく、一般的にこの種のデジタル画像は、実物のくすんだ色彩よりも「綺麗

に」見えがちである。また、実物の微妙なイメージや雰囲気がデジタル画像では消えている場合も多い。つまり、デジタル画像が、真の鑑賞の妨げになる可能性も捨てきれない。

ヴァルター・ベンヤミン（Walter Benjamin 1892-1940）らの言う「今ここに」という「アウラ」を伴う実物（美術作品）の存在が、デジタル画像によって次々に拡散し、社会と精神を破壊することに繋がらないとも限らない。というのも、「オリジナル（真作）」の価値はどこまでも高く、われわれは究極的に、そこに戻らねばならないからである。しかし、美術作品にはイメージの層と並んで意味の層が含まれており、その意味の層は、デジタル化によって一層明確に伝達することが可能となる。加えて、技術革新がどこまでも進んで、実物とデジタル画像との違いを区別できない時代を迎えることが無いともいえない。

結論的にいえば、技術革新の時代というのは、もはや後戻りはできず、われわれは、いわゆる美術作品の「オリジナル神話」を学問的にも鑑賞においても、正当かつ賢明に乗り越えて行かねばならない。美術作品のデジタル化には、長所と短所があることを忘れてはならないが、オリジナルに執着する近代の価値観を脱却して、短所を排除しつつ長所を活かす有効活用をしつかりと考えてゆかねばならない時代を迎えたようである。

（文学部 中谷伸生）



東アジア文化交渉学会第11回国際シンポジウム開催

去る5月11日(土)、12日(日)の両日、ドイツのフリードリヒ・アレクサンダー大学エアランゲン・ニュルンベルクにて、東アジア文化交渉学会2019年度年次大会、及び第11回国際学術シンポジウムが開催された。大会のテーマは、「東アジアの知識の変遷と超越——科学技術史におけるグローバルネットワーク」であり、日本、韓国、シンガポール、中国、台湾、香港等のアジアの国と地域及びヨーロッパ、アメリカから、150名以上の研究者が大会に出席した。

大会は、Thomas MULLANEY教授(スタンフォード大学)による「Forget Everything You've Heard about 'Character Amnesia': Chinese, Electronic Writing, and the Birth of the Hypograph (漢字と忘れ記憶からの解放：中国語、電子書写と

ヒポグラフについて)」と程美宝教授(香港城市大学)による「Rethinking media history in modern China (現代中国メディア史に関する再思索)」と題する基調講演より幕が開けられた。2日間にわたり、29のパネルで研究発表が行われた。また、2020年東アジア文化交渉学会第12回国際学術大会は、中国河南省鄭州にある鄭州大学にて開催されることが決定した

東アジア文化交渉学会第12回国際シンポジウム

テーマ：「文化交渉の媒介としての漢字—その伝播と影響」
会場：鄭州大学漢字文明研究センター
日時：2020年5月9日(土)、10日(日)



東アジア文化交渉学会第11回国際シンポジウムに参加して

2019年5月11日(土)、12日(日)、フリードリヒ・アレクサンダー大学エアランゲン・ニュルンベルク(ドイツ)にて、東アジア文化交渉学会第11回国際シンポジウムが開催された。本学会初のヨーロッパでの開催となった。

開催地であるエアランゲンは、多くの顔をもつドイツ中南部の都市である。歴史的には、多数のカルヴァン派新教徒がフランスから移り住んだ地として知られており、市街の中心には、もっとも古いカルヴァン派教会のひとつであるHugenottenkircheがある。こうした宗教的側面の他にも、会場となったフリードリヒ・アレクサンダー大学エアランゲン・ニュルンベルクを中心とした大学都市、ドイツの電子機器メーカーであるシーメンスの拠点を抱える工業都市、近年では進歩的な環境・自然保護政策を推進する緑豊かな環境都市としての一面も備え、複合的な特徴をもつ都市となっている。

さて、今大会のテーマは、「東アジアの知識の変遷と超越——科学技術史におけるグローバルネットワーク」であった。

このテーマにもとづいて10の分科会が設置され、東アジア地域における東西文化および地域内文化の交渉史について討論が行われた。参加した29のパネルでは、近代以降の科学技術の発展にともなって形成されたグローバルな人的・物的ネットワークが、東アジアにおける知の伝播や受容、再編において果たした役割に関して、文学史や芸術史、政治史、思想史など様々な角度から検討が加えられた。それぞれのパネルでは興味深い研究成果が発表され、会場参加者との質疑応答を通して活発な議論が展開されていた。また、これまでの大会と比べると、欧米の研究者の姿が多く見られたことも印象的であった。東アジアの文化交渉史をより精密に意味づけてゆくには、他の諸地域の歴史や世界史全体との相関関係、相互作用を鳥瞰する視座が必要となる。今大会をきっかけとして生まれた研究者間の多彩な交流を思うと、意義深い大会であった。

(東西学術研究所非常勤研究員 末村 正代)

研究員の活動報告

「ワクワク感こそが原動力」

私は現在、関西大学の東西学術研究所の非常勤研究員を務めています。研究では、江戸後期から昭和前期にかけて商都大阪に存在した泊園書院に注目し、そこで学んだ門人たちの思想と行動を考察しています。泊園書院は四国高松出身の藤澤東咳（ふじさわ・とうがい）によって開かれた漢学塾で、明治時代の最盛期には全国から約五千人の門人が集まったといわれています。

最近ではKU-ORCASのプロジェクトの一環として、おもに門人たちの行動面の解明に取り組んでおり、千人近くにのぼる門人情報を収集・整理しつつ、その過程で得られた成果をその都度発表しています。具体的には、泊園書院の門人名簿を手掛かりとして、大阪や地方の公立図書館に所蔵された門人の伝記および日記資料を探索していくのですが、意外にも政策者や企業家など実務家として活躍した門人が多数いることがわかってきました。その中には武田薬品や伊藤忠商事などの有名企業の創業者も含まれます。またつい数日前にも、（これは正確には門人ではないのですが）のちに三菱財閥を率いる岩崎弥太郎が幕末期に泊園書院をおとずれ、東咳と話し込んでいた事実が判明しました。他にも、長州藩の尊攘激派と行動をともにした土佐脱藩浪士の千屋菊次郎と能勢達太郎が泊園門人であることもわかっています。もしかしたら泊園書院は、明治維新期における政治・経済面の一大変革を担った人々に支持されていたのかも



しれません。そんなあくまで漠然とした仮説を提起するレベルでしかないのですが、未知の事実を発掘するワクワク感を原動力として日々奮闘しています。

私にとって、この種のワクワク感は資料調査の場面以外でも体感することができます。その一つに国際的な研究会があります。私は運よく、昨年より渋澤栄一記念財団助成の研究プロジェクト「近代東アジアにおける実業家の果たした役割に関する総合的研究」に参加していますが、この研究会のメンバーの国籍は日本・中国・韓国・アメリカなどバラバラです。そこでは、泊園門人とよく似た立場のイノベーターが韓国にも存在するよ、とのアドバイスをいただくなど、大変勉強になるものでした。また研究会終了後の飲み会や観光地巡りでは、彼らとプライベートな交流をすることもでき、色々な意味で刺激的な経験でした。

このように、なぜだかわからないけれどチャレンジングな泊園門人を研究対象とすることで、私自身もいつの間にかチャレンジングな環境に囲まれつつある。そんないまの自分が心地よく、あらためて研究者になって良かったなあとと思っています。

（東西学術研究所非常勤研究員 横山俊一郎）

「学術研究員からの便り」 ～ローマより

現在、学術研究員としてローマに滞在している。時間という贅沢を与えられ、図書館や文書館で宝探しのようには文献のページを1枚ずつじっくりとめくっている。なかなかそう簡単には見つからないが、時には意外な遭遇がある。

ウルバニアナ大学のアーカイブで1903年の文献をめくっていたところ、1枚の写真が出てきた。西洋人宣教師の肖像写真だったが、私の目を引いたのは、写真の下に印刷された文字だった。そこには「山本讃七郎」「北京」と記されていた。

山本讃七郎（1855-1943）は、1900年に北京に渡り、1901年に霞公府に写真館「山本照像館」を開店、1904年には西太后の肖像写真を撮影した。私がこの人物の名前を最初に知ったきっかけは、関西大学鱒澤文庫所蔵の深澤暹（1876-1944）著『北京官話全編』を通じてである。中国の歴史や伝統文化、さらには当時の社会状況や人々の暮らしを題材に展開される会話の中に、腕利きの日本人の写真館が登場する。氏名こそ明記されていないが、おそらく「山本照像館」であり、そこで一度写真を撮ってみるべきだ、と登場人物が知人に勧めるという内容であった。

件の写真は、1900年前後に北京北堂の司教を務めていたフラ

ンス人宣教師アルフォンス・ファビエ（Alphonse Favier, 樊国梁、1837-1905）の肖像である。穏やかな表情を浮かべた67歳の司教の姿が、鮮明に写し出された美しい写真である。

120年前の北京を生き抜いた日本人写真師とフランス人司教の接点の思いがけない邂逅に、ローマの強い日差しをしばし忘れるひとときであった。

（外国語学部 奥村佳代子）



「テヴェレ川を挟んで」

第2期 ICIS 三研究班の紹介

2013年度より活動を行ってきたICIS 三研究班（G-COE 後継班）は2019年3月末を以って任期満了となり、6年間の活動が終了した。

2019年4月より新たなICIS 三研究班が発足し、文化交渉学研究拠点としての活動を開始した。

なお、第1期の三研究班の研究成果については今年度刊行予定である。

【言語交渉研究班】

周縁からのアプローチを基盤とした近代における
東西言語文化交渉とアーカイブ構築

主 幹	内田 慶市（外国語学部 教授）
研究員	乾 善彦（文学部 教授）
	奥村佳代子（外国語学部 教授）
	玄 幸子（外国語学部 教授）
	沈 国威（外国語学部 教授）
委嘱研究員	高田 時雄（復旦大学歴史学系 特聘教授）
	田野村忠温（大阪大学大学院文学研究科 教授）

【東アジアの思想と芸術の文化交渉研究班】

東アジアの哲学、思想、芸術の文化交渉を研究する

主 幹	中谷 伸生（文学部 教授）
研究員	吾妻 重二（文学部 教授）
	陶 徳民（文学部 教授）
	二階堂善弘（文学部 教授）
	長谷部 剛（文学部 教授）
	酒井 真道（文学部 准教授）

【ユーラシア歴史文化研究班】

文書・出土・石刻史料が語るユーラシアの歴史と文化

主 幹	森部 豊（文学部 教授）
研究員	澤井 一彰（文学部 教授）
	篠原 啓方（文学部 教授）
	藤田 高夫（文学部 教授）
	池尻 陽子（文学部 准教授）
委嘱研究員	吉田 豊（京都大学大学院文学研究科 教授）

編 | 集 | 後 | 記

ニューズレター第5号を発刊しました。◆今号の巻頭言は、大坂画壇で活動した画家の大岡春斗による絵巻のデジタル化の話題です。ここではデジタル化の長所と短所を採り上げて述べていますが、新しい時代は、われわれを否応なくIT・コンピューターの世界へと誘ってゆくでしょう。従来の研究の考え方を大きく変えねば、諸問題に対応できなくなることは間違いないです。◆東アジア文化交渉学会第11回国際シンポジウムが、ドイツのエアランゲンのフリードリヒ・アレクサンダー大学で開催され、世界各国から研究者が集まってきました。今回も事務局の方のテキパキとした事務さばきによって、滞ることなく大会が進行しました。加えて、本大会に大倉頼声子氏より支援があったことも記しておきます。このエアランゲンでの11回大会については、開催報告が本誌に掲載され、また、東西学術研究所非常勤研究員の末村正代さんによる詳細な報告も載せられていますので、お読みください。◆東西学術研究所の一つのルーツである泊園書院について、東西学術研究所非常勤研究員の横山俊一郎さんが寄稿しており、研究の「フクワク感」に関して興味深い感想を述べています。若い研究者の新鮮なエネルギーを強く感じる内容です。

表紙右上掲載写真：

【左上】【右下】第11回東アジア文化交渉学会会場
【右上】最新杭州西湖全圖
【左下】涼舟図 禅画篇 西山完暎画

図書の出版

■ 関西大学東西学術研究所研究叢刊

西教東漸と中日事情

— 拝礼・尊厳・信念をめぐる文化交渉 —

陶 徳民 著

2019年3月31日発行／376ページ



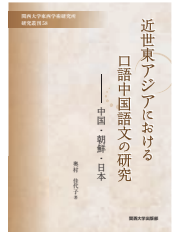
近世東アジアにおける

口語中国語文の研究

— 中国・朝鮮・日本 —

奥村 佳代子 著

2019年3月31日発行／378ページ

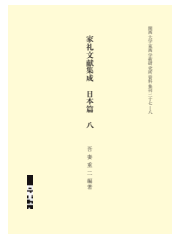


■ 関西大学東西学術研究所資料集刊

家礼文献集成 日本篇 八

吾妻 重二 編著

2019年3月31日発行／368ページ



『拝客訓示』の研究

— 解題と影印 —

内田 慶市 編著

2019年3月25日発行／252ページ



シャルトル大聖堂

— 秋山博愛撮影写真追懐 —

中谷 伸生 編著

2019年3月30日発行／246ページ



発行：関西大学文化交渉学研究拠点
(Kansai University Institute for Cultural Interaction Studies)

〒564-8680 大阪府吹田市山手町3-3-35
TEL：06-6368-0653 FAX：06-6339-7721
E-mail：touzaiken@ml.kandai.jp
URL <http://www.kansai-u.ac.jp/Tozaiken/>

発行日：2019年（令和元年）8月